

教育ママとなった母は、「お前は一中、一高、東大独法科を出て、高文試験に合格しなさい」と私によく言ったものだ。父の仕事を見て、古くさ

私の履歴書

司 憲 庵 久 栄
けん けん ぶん ちゆう えい

⑤

い僧侶の世界にモダンイズムはないと思つたようだ。

勉強にはやまかましい母にもおろかなところがあった。

私はやんちゃだったから、男の子だけでなく女の子も押でたたいに泣かせた。隣組が総出でうちを押し掛けてきて、母は平謝りだったが、私には

ケンカするなどもひと言も言わなかった。コールドールで、ひとのうちの玄関に落書きをした時も、母が「申し訳ない」と言つて消しに行つたが、何も言われなかった。

父にしかられたのは二度しかない。父が結核の手術の後、家に帰ってきて、父と妹と私の三人で風呂に入った。父の背中の手術跡を見てすごいな

「一高、東大へ」母の口癖

集中力の大切さ 父に学ぶ

と思ひながら、なにかの加減で妹をたたいた。そうしたら父が私の頬を平手打ちした。よくないことをわかつてやることは、よくないことだと、教えよつとしたのだと思つた。

もう一回は、小学校四年か五年生の冬、真つ赤に焼けた炭を火鉢に持っていこうとして、青畳の上にまき散らしてしまつた。私があわてていると、父は「ケンジ、事をなす

に哲学も宗教もない」と大言声でしかつた。いったん事を決めたら、一生懸命に集中してやれということだった。父は説教師で声が大きいから、怒られると怖かつた。

父は盆栽や絵、彫刻、骨董が好きだった。重話を話すがうまく、ある時、小学校に重話を話しに来たが、友達は私の父だと知っているから恥

ずかしかつた。普段の印象は全然、重話っぽくなく、日本刀に打ち粉をしている姿など美的なナルシストのイメージが強い。

当時、中学校の受験戦争は五年くらいから始まり、その前哨戦が級長か副級長になるかで、私は六年生まで級長を続けた。母は一中のある永田町まで私を連れていったが、学区制が決定し、私は府立五

中（現東京都立小石川高等学校）に進むことになった。

中学入事前の年に戦争が始まった。父が作ったハワイ学寮にはたくさん日系二世がいて、大正大学、高等師範など日本の大学で学んでいたが、多くの人が開戦で帰れなくなった。私が記憶している



府立五中に入ったが、制服は軍服

に戦闘帽に替わっていた。英語の授業で英語の本を読まされた時、「君の発音はいね。どついうわけ」と質問された。幼児期にハワイにいたことを説明すると、「そうか、大事にしたまえ」と励まされた。いまだにクラス会で「お前、あの時だけは違つていたな」と言われる。

二年生のころ、海軍兵学校に行つた卒業生が真つ白な夏の第二種軍装で、短剣をぶら下げ

て五中の廊下をさつそつと歩いてのを見たと。こんな格好いい存在が世の中にあるのかと、一目で海軍兵学校におこがれた。こうして母の夢見ていた「一高、東大……」という出世路線はだんだん危うくなっていった。